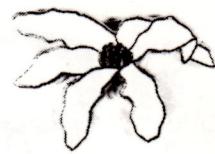


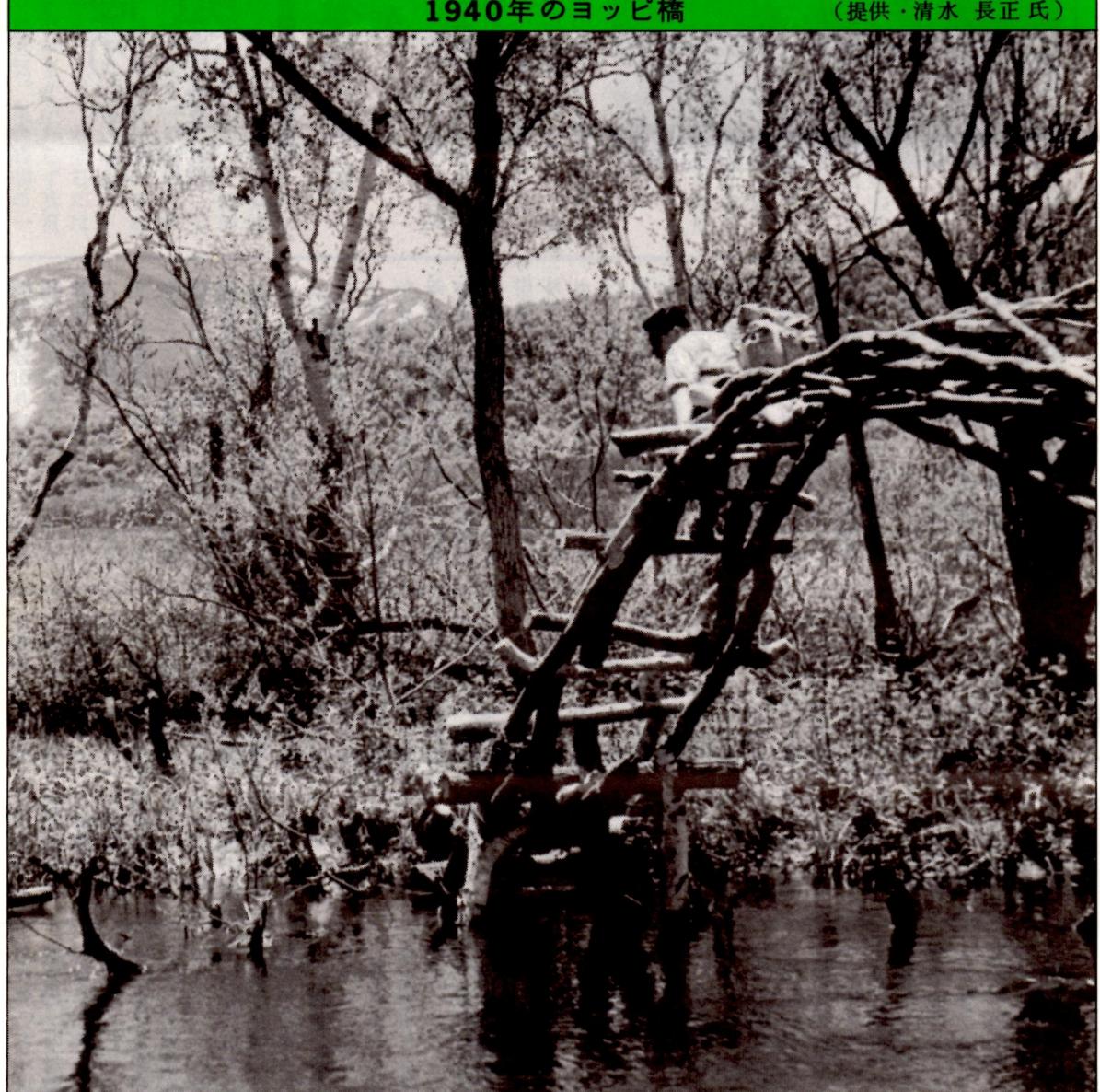
尾瀬の自然



(題字 初代環境庁長官 大石武一氏)

1940年のヨッピ橋

(提供・清水 長正氏)



尾瀬の自然を守る会



尾瀬の自然保護20年と世界文化自然遺産条約

日本自然保護協会理事

金田平

「岩清水が潰れる」という
平野長靖さんの新聞投書、大
石武一環境庁長官への直訴、
全国自然保護連合の発足等、
あの頃のことが走馬燈のよう
に思い出される。



そして20年、いま関越自動車道、上越新幹線、さらに会津鬼怒川線が開通し、尾瀬への進入は急激に便利となり、入山者が急増している。しか

問題は分かりにくく、一部の関係者が気にしているだけで世間一般には通じていない。入山者急増に対する対策ももちろん重要だが、入山者が増加することが自然に大きな影響を与えるのだということを周知させることができ、我々の取り組まなければならないもうとも重点項目かも知れない。

危機感が湧かない

実際にオーバーニースなどのかどうかについてさえ結論が無い。環境庁は踏みつけに対

しては、ほぼ全コースに木道併用化槽の完備とその排水を外に運び出すパイプラインとポンプアップ装置を作る、といふ姿勢を打ち出し、工事に取りかかっている。問題は踏みつけと汚水だけではないのだが、大きな部分としての対策がなされることで、世間一般的には入山者制限の必要性があつて良い。この場合、尾瀬は、色々な形の利用があつて当然だ。物見遊山があつても良いだろう。しかし、その中問題点について会報その他で尾瀬が優れた景観と学術的価値を持ち、従つて厳正に保護し、高度に管理すべき国際的水準の自然公園として位置づけられるべきことの合意は得られよう。

「正倉院に匹敵する特別天然記念物」であつて、景観的にも學問的にも貴重であることまちがいなし。これに異論

尾瀬が、大石武一氏の言う心が無い。尾瀬が、大石武一氏の言う心が無い。

尾瀬が、大石武一氏の言う心が無い。

尾瀬が、大石武一氏の言う心が無い。

ところで入山者が過剰かどうかについては、有形無形の価値判断に左右される。前述したように踏みつけによる損壊や、屎尿雜排水は最も大きく、また分かりやすいインパクトだろう。しかし有形のものとしても、まだいくつかの問題がある。たとえば三平峠、燧岳、景鶴山至仏山の稜線に囲まれた窪地という地形から、多大な入山による大気組成や微気象の変化もある。同時に宿泊施設やゴミ焼却などで出る排熱や排気も大きいはずだ。併用化槽問題に関してなら当然、水の收支が問題となる。稼働量の増加と共に取水が増える。

られている「世界文化自然遺産条約」の対象としても、真っ先に候補に上げられるべきだろう。とすれば、このタイプの自然公園として、入山者に対し十分な事前の教育が行われ、さらに優れた案内人によって周遊する形が必要なのである。そしてこの方法は歐米では当然なのだ。だからこそ、かねがね当会の主張する

入山口にビジターセンターを設置することと、ガイドの完備を要求しなければならないのだ。

条約対象の第一候補に

尾瀬保存期成同盟が日本自然保護協会の母体であり、日本の自然保護の原点が尾瀬だといわれるなら、自然公園の利用方改革の原点も尾瀬にあつて良い。この場合、尾瀬は、色々な形の利用があつて当然だ。物見遊山があつても良いだろう。しかし、その中問題点について会報その他で尾瀬が優れた景観と学術的価値を持ち、従つて厳正に保護し、高度に管理すべき国際的水準の自然公園として位置づけられるべきことの合意は得られよう。

尾瀬が、大石武一氏の言う心が無い。



漆畠会長の説明を聞く参加者

月例観察会「柿田川」報告

ミシマバイカモ咲く 120万トンの湧水帯を行く

富士山の湧き水が作った川、柿田川。六月の月例観察会は、この柿田川で実施した。開催案内を各紙に投稿したところ、「朝日」「読売」「毎日」に掲載され、電話での問い合わせは、40件ものぼった。せは、6月9日(日)の当日には、梅雨入りにもかかわらず真夏のような天気。集合時間の一

総収支の量が大きいことや、既に東京電力の取水があることで取り上げられていないが、デリケートな尾瀬の自然の特質からすれば無視できない。通路沿いに尾瀬になかった植物が見つけられている。入山が容易になるにつれ、外からの種子や微生物の搬入が容易となつたということだろう。国外の自然公園では、入園時に靴や着衣の着替えをさせているところがあるという。いま鳩待峠口に靴洗い場が設けられている。構造的に入山者の全てがそれを通過する形に設けられていないというのは、切実さに気付いていないとい

日本のお自然公園では野生動物との接触がほとんど話題にならないが、尾瀬には国産の大形獸のほとんどが棲息する。しかし現在のような入山量では、ほとんどの獸は出て来られないだろう。獸の生活にも影響を与えていた。

一方、無形のものとして、人が溢れる状況が自然景観を壊しているという問題がある。ただこの問題については、延

うことだろ。木道が腐敗して起こす富栄養化の問題も指摘されて久しいが、解決はしていない。

獣の生活にも影響

日本のお自然公園では野生動物との接觸がほとんど話題にならないが、尾瀬には国産の大形獸のほとんどが棲息する。

しかし現在のような入山量では、ほとんどの獸は出て来られないだろう。獸の生活にも影響を与えていた。

一方、無形のものとして、人が溢れる状況が自然景観を壊しているという問題がある。ただこの問題については、延

時間も前から、続々と参加者が集合してきた。遠くは、茨城県の取手や千葉県の鎌ヶ谷からの参加もあつたが、大部分は自然の水が貴重となつた東京都区部や横浜あたりの人達で、中高年のご婦人、ご夫婦が多かつた。総勢八十五名、過去最大の参加者となつた。案内は、「柿田川みどりのトラスト」の漆畠信昭会長にお願いした。

柿田川は、静岡県清水町の国道一号線の直下で湧き出で、一・二キロメートルを流れ下り、狩野川に合流する。周辺

木道の完備についても「旅館からスリッパで行ける松の廊下だ」との悪口が出るくらい入山者は湿原の感触は無理としても、土の感触も味わうことが出来ないのだ。それは自然公園としては大きなマイナスだろう。

「ミニ尾瀬」の造成を

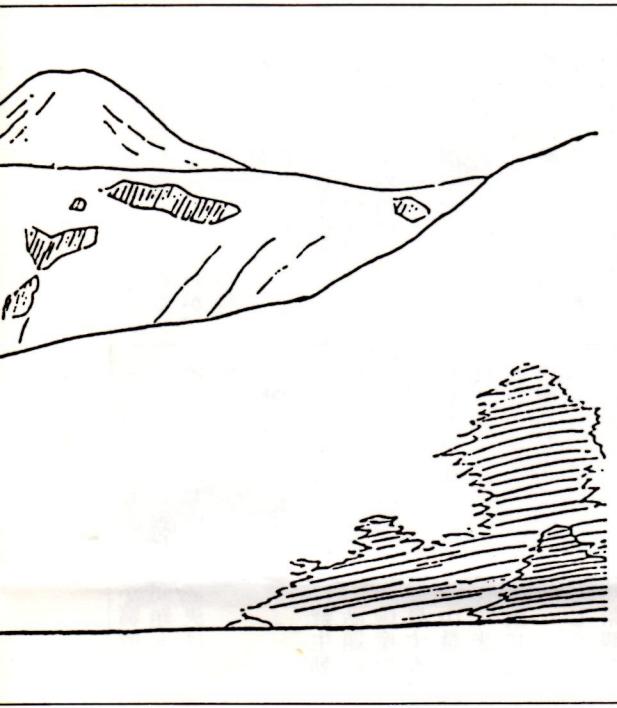
一方、自然公園の利用について、ただ「人が行くから行く」ではなく、そこへ何をしに行くのかを明確にする習慣を求めなければなるまい。尾瀬の場合に限らないのだろうが、尾瀬に行ってどうしたという部分は不問で、ただ「尾瀬に行つた」というのが多い。だとしたら尾瀬の周辺に「ミニ尾瀬」と呼ぶ園地を作り、尾瀬にはどういうルートで、どの季節、どの時間帯に、どのくらいの人が入つて良いのかが論じられるべきなのだろう。

柿田川は、湖畔林の伐採、オランダガラシ(クレソン)栽培による農業散布、湧水量の減少、観光公害などの問題をかかえている。このたまに、三年前から土地の買取り運動(トラスト)を行つてゐる。漆畠会長に言わせると、「我々は死に物狂いでやつてゐる。遊び半分の人たちの相手は断つていて。」ということだったが、「尾瀬の自然を守るために引き受けくださいました。」

ある秘密の観光ポイントに連れていくつもられた。柿田川の魅力は、湖畔林と水草の美しさ。なかでも三島地方特有のミシマバイカモの水中花を、足元そばで観察できたのに全員感嘆の声をあげた。何ら保護の手立てのなかつた柿田川。十六年前にゼロから出発して、町や県を動かすことし三月三十一日には環境保全のための財團法人の認可を得るまでこぎつけた柿田川を愛する人達。「死に物狂い」の運動はどこにでもあるものじゃない。

二尾瀬」と呼ぶ園地を作り、大方の入山者はそこで満足させたらどうだという考え方ができる。ほとんどの客には座敷で対応し、よほどの賓客だけを奥座敷にお通しするといふ対応の仕方だ。もし、さらに尾瀬にこだわる入山者が増えるなら、これをはじめに考えることが必要だろう。学生時代は修学旅行、勤め先では幹事のセッティングした親睦旅行、そして農協の旅行、業者のパック旅行というパターンが主體性のない旅行をはやらせてゐる。そこへ江間章子の「夏の思い出」が「ただ、尾瀬に行く」のグリーブを増やした。

(武繁春)



ハトマチ峠途上より西に笠ヶ山を望む

尾瀬紀行

武田久吉 (1)

武田久吉が初めて尾瀬に入ったのは、一九〇六（明治三十八）年七月のことである。当時二十二歳だった。「尾瀬紀行」は翌年四月に発行された日本山岳会機関誌『山岳』の創刊号に掲載されたが、この中で武田は「（これまで）紀行として尾瀬に関するものは殆んどなし」と述べている。

これが三年後に尾瀬に入った大下藤次郎に大きな影響を与えた。武田らがたどったコースは日光湯元—金精峠—戸倉—鳩待峠—尾瀬ヶ原—尾瀬沼—三平峠—丸沼—湯元で、行程は五日間。このうち尾瀬に直接関係のある部分を抜粋して連載で紹介する。（編集部）

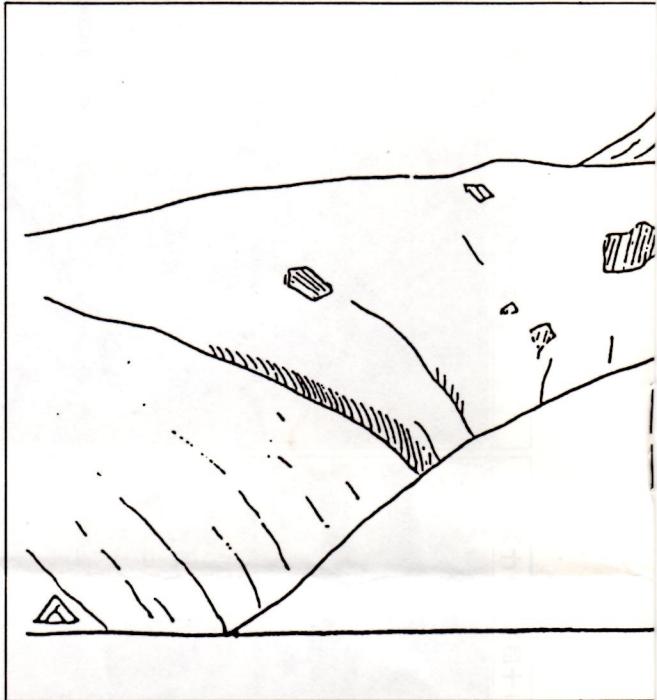
七日 今日も幸晴天なり。午前四時起床す、朝食も済まぬ内よりはや馬の催促なり、彼の男の尽力空しからでにや、或は多くの金を得ん為にや、戸倉迄行かんと云ふ馬一頭あり、行李、鞆、写真器等を馬背につけ、東小川を行でたるは六時頃なりしが、発するに臨み、家郷知友等に宛てたる書面数通を主婦に托す、中には「此の地風俗淫卑惇朴ならず旅宿は不潔にして不快極まれり」云々と葉書に認めたるもありき。東翠館の一泊料は六十銭。

東小川より越本に出で、本街道を行くは路遠し、山峠の間道をぬけて近道せんとて、直に北に向ひ、畑の中をすぎ、森林を穿ちて行く、ダイコンサウ、ホタルブクロ、キバウエン等露重げに、ス、キ、カヤ等生ひたる丘陵を上りゆけば、アヅマギクの花未だ散りやらず。やがて丘の背に出づ、眺望も頓にひらきて、武尊の連山は起ちは峰をなし伏しては谿をつくり、あざやかに我等が目の前に現れぬ、道は復た下りて、疎林を通ず、ヤマグハの花、緑濃き葉に映じて、雪白の色いやすえたり、彼の錆菌のついたるトリアンショウマは此の道にも鮮からず、紅白並び咲ける雑草の間に立ちて、さみしげに笑めるムラサキの、根はゆかりの色深し、又ヤマハンノキの大木の梢にヤドリギの着けるを見き。程なく道は畑の間に出てぬ、片品川の流れは石に激して白く、川の両岸には人家も見え初む、坂道だらくと下れば、街道に出でたり、此処は土出村にして、字カンノと呼べり、人家も少なからず、畑の間にはクハを植えたるが、何れも大木となれる梢に登りて、葉摘めるもあれば、腰に籠を結びつけ、手にも大籠もちて摘める葉を運べるものあり。道は片品川の左岸に沿ひ、幅広くして平夷なり、左は川に臨み、右にはアカマンの林等あり。やがて片品川を渡り、小坂上れば木影畠中に人家の点綴せる所に出づ、此処は戸倉とぞ。もと戸倉には旅宿なく、木賃宿一屋ありしのみなりしが、萩原甫作といへる者が人のすゝむるにまかせ、昨年より業の片手間に旅人の宿もすることとなりきと、東小川にて教へられたるまゝ此處に入りぬ。我等の荷つめる馬ひきたるは、二十歳に近き女子にて、頭には手拭を被り、黒き眼鏡をかけたりしが、真鍮の枠はうねりて、高からぬ鼻梁よりはづれ、危く頬に懸りて止まれる等、一見興ある者なりしが、戸倉へは初めてなりしと見え、意外に近かりしとて喜びたりしが、定めの料金壹円を得て帰り行きぬ。

我等は極端に腰打ちかけ、主人を呼びて我等の意を通せしに、尾瀬に向ふと聞きていたく驚ける彼は、先づ人夫を得ることの望なきを云ひぬ、「若し前夜より其の趣の知れたらば尋ねる當もなきにあらねど、即座にては平常なりとて人を得るは易からず、殊に今は養蚕時なれば、山に入る者皆無なり、村はづれに一人蚕飼はぬ者あれど、今日は生憎出でてあらず、されど一応捜し皆ん」とて、一二時が程柔切る手をやすめて村中歩きたりしが、绝望の色顔にうかべて帰り来りぬ、「明日ならば必ず人は得られんと思へど、今日は永らくつゞきし

武田久吉（たけだ・ひさよし）

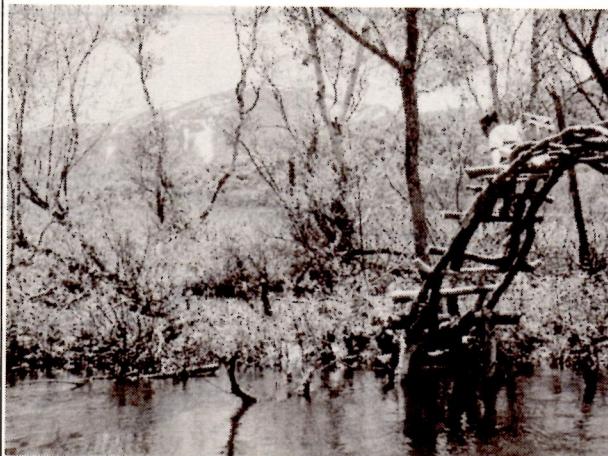
1883(明治16)年東京生まれ。東京府立一中時代、植物の研究に関心を抱き植物学同志会に参加。明治38年10月、同志7人と日本山岳会を創立。1910(明治43)年、英國に渡りバーミンガム大学などで植物学を学ぶ。明治28年の妙義山登山を皮切りに富士山、八ヶ岳、日光、尾瀬、白馬岳、北岳などに登り植物を採集。昭和5年に帰国後、京大、九大、北大などで植物学を講義する。理学博士。初代日本山岳協会会長。著書に「尾瀬と奥鬼怒」「原色高山植物図鑑」など多数。雑誌、新聞への寄稿も多い。1972(昭和47)年6月7日逝去。90歳。



雨天の後なれば、人々は今にして桑の葉摘みおかねば、知り難き明日の日雨もならば、見す／＼丹精の蚕兒を日干しにすべければとて、誰一人応ずる者なし、若し明日にても叶ひなば、穢れどまげて我家に泊り給へ、人夫の周旋怠るまじ」と気の毒げに告ぐ、「さらば止むことを得じ、一泊して明日のことよせん」とて、草鞋の紐解き、足洒きて座敷に入る。主人の指図に家人等は茶よ菓子よと持ち来り、寒からんとて座敷に大布團二三枚重ねて座を設け呉よたり。此の地は日光湯本よりは低けれど、抜海三千尺が上なること明にて、主人に聞く所によれば、湯本より八里余一日にて來ること決して難事にはあらぬ由なり、会津に入るには沼山峠(又の名尾瀬峠)をこめべく、松枝岐迄も八里に余り、其の間村落絶えてなく、風雨の後には道路も往々破壊して通ぜぬ事ありとぞ。此の日我等は幸の晴天に、前の日採れる草の手入をし、東小川にて干し残れる紙を乾し、明日の準備に忙し、午後、風呂の出来たれば入りませと云はるゝに、今後は我先づ瀬ぶみせんとて、風呂場に行くに、其処は椽のはづれにかたばかりに葦簾もて畳み、風呂桶を据えて湯沸かしたり、衣を椽にぬぎすてゝ槽に近づき見るに、籠のはじに何種にやあらん*Vanessa*の垂蛹一つ着きてさがれるあり、されど東翠館の如くにはあらず、湯清ければ心地よし。されど田舎の常として、此の家も蠅の多きには我等二人少なからず困却したり、夜も三四匹は飛び居れど、昼間は其の数何百なるを知らず、食物の中に潜り入り、時には其れと共にあはや口に入らんとしたることもありき。

夜となりて人夫二人、主人の奔走の効ありて来れり、一人は獣師にて、此辺の山知らぬ処なしと云ふ者、一人は越後の者には業は何やら知らず、慾深さだけは確なり、尾瀬に草採りに行くとなるが、帰りは栗山を越えて日光に出でん所存なり、一夜は燧山麓の堂に泊り、第二夜は川俣に宿り第三日目には湯本に戻るべき予定なるが如何と問へば、草採らんとなれば尾瀬ヶ原に行くこそよけれ、それより燧ヶ岳の麓を匝りて沼山峠に出で更に山越しに栗山に入るべし、されど路は殊の外悪しければ其の覚悟なかるべからずと答ふ、我等は路の険悪は恐れねば、花多き所に導くべしと命じ、さて日当は幾何を望むかと尋ねれば、一人一日金五円にて、日光より帰村する日をも加へ、総計金八円宛を賜はれと云ふ、法外の高価なれど、時が時なれば止を得ずそれと定め、翌朝五時出立と約して彼等は去りぬ。我等は食料品として米を携ぶるは煩多く殊に一夜のことなればとて、蕎麦粉を用意し、尚砂糖をも求むれば、今は生憎貯切れて無く、越本を行かざれば得難いとの答を得ていたく失望したりしが、此の土地の者は黄粉を塩を交へ、之を蕎麦搔につけて食へば、黄粉を持ち行き給へと云ふ、物は試し、不味ければよす迄なりとて、其等をも求め、其の他に豆を煮させて携ふることとし、十一時頃寝に就く、家人は皆夜を徹して桑切りに忙はしげなり。戸倉の一泊料金五拾銭。

一九四〇（昭和十五）年六月



一九六七（昭和四十二）年八月



一九八九年・夏



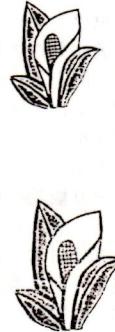
ヨツビ橋三態

群馬、福島、新潟三県の県境が接するあたりのヨツビ川にあるのがヨツビ橋。尾瀬ヶ

原の竜宮や牛首の分岐から東電小屋方面に向かうには、この橋のお世話にならなければ

父君・故清水長輝氏が撮影した貴重な一枚である。本会の内海代表が、無理を言って押借することに成功した。

両岸からカバの小径木をつなぎ合わせた素朴なアーチ橋で、いまの尾瀬に入つてくるハイカーには渡れそうもない



ならない。

入山者が増加するにつれ、この橋も姿を変えてきた。表紙の写真（上）は、一九四〇（昭和十五）年六月ごろのヨツビ橋。清水長正氏（東京都渋谷区神山町三一ノ一四）の

父君・故清水長輝氏が撮影した貴重な一枚である。本会の内海代表が、無理を言って押借することに成功した。

両岸からカバの小径木をつなぎ合わせた素朴なアーチ橋で、いまの尾瀬に入つてくるハイカーには渡れそうもない

「読売」に児玉氏登場

橋である。

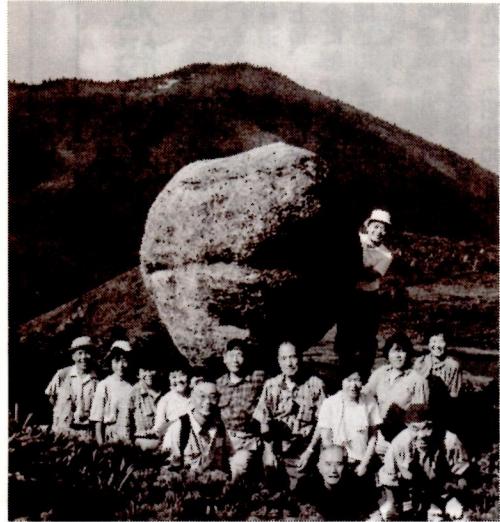
写真（中）は一九六七（昭和四十二）年八月に撮影したヨツビ川に似合う橋だった。写真（下）は現在のヨツビ橋。この写真では分からぬが、真っ赤に塗られた本格的な鉄橋である。大都市の下町にでもありそうな橋を架けられ、ヨツビ川が恥ずかしがっているようだ。一九八九年夏に撮影した。

本会の児玉芳郎事務局長は6月5日付「読売新聞」が尾瀬沼東側のカマツボリ湿原と北側・浅湖湿原の林地内のぬかるみに、環境庁が試験的に「擬木」の木道を設置したという報道にコメントを求められ、「分解されないと」ということで、生態系へのインパクトはないかもしれないが、尾瀬に舗装道路を作るみたいであまり好ましいことではないのではないか」と述べた。

一方、波戸場秀幸研究部長は、5月19日付「上毛新聞」のインタビュー欄「日曜トーキートーク」に登場。入山者は、特別区域内の山小屋ではなく、戸倉周辺の旅館に「合併浄化槽やバイオラインがどれだけの効果があるだろうか……山小屋を含め、施設は最低限必要な緊急避難、連絡施設的なものに、とどめるべきではないか」など、本会が主張している尾瀬を守るためにマスター・プランに沿った回答をした。

ニュース フラッシュ

平ヶ岳観察会に参加して



玉子石で一休み

8月25日。夕食後の学習会で「平ヶ岳は遠い太古の昔、海の底だったのです。およそ六千年前、地下の深い所で貫入してきた花崗岩が刺激となって、上昇するようになつた」とその生い立ちから現状までについて、北魚沼地区理科センターで制作したスライドを見ながら、解説を聞きました。

「平ヶ岳を愛する会」を結成し、平ヶ岳のかけがえのない貴重な自然を未来に残そうと詳しく調査し、美しい自然のすばらしさを理解してもら

うと同時に、破壊から守ろうと努力している人達がいることを知りました。

8月26日。夜明け前、銀山平の伝之助小屋をマイクロバスで出発しました。雨池橋から中ノ岐林道に入り、でこぼこ道を走ること約1時間、登山口に着いたときには明るくなっていました。

ひんやりする空気を胸いつ

ぱい吸い込みながら、観察会

の心構えを講師の波止場先生と徳光先生よりお聞きしました。参加者は男七名、女六名の20代から70代までの13名。

古田 勝子

登りはじめると、波止場先生が次々と草花の名前を教えて下さいました。ハクサンフウロ、シラネニンジン、ゴゼンタチバナ、サンカヨウ、ハリブキ、ガマズミ、クロモジ等々、60種類以上もあつたで

しょうか。そのたびに立ち止まり、美しい色に感嘆の声をあげました。

玉子石で一休みしました。

花崗岩の節理にそつて水がしみこみ、風化してできた奇石の玉子石、その後ろに広がる地塘、そして、そびえ立つ剣が倉山、滝が倉山が一枚の絵を作り出していました。平ヶ岳の見どころについて、徳光先生のお話を聞きながら、自

然をなんとか今の姿でとどめたいものです」という「平ヶ岳を愛する会」の人々の願いが、小さなささやきになつて、草原のあちこちから聞こえるような気がしました。

平ヶ岳

「湿原は生きているんです。そこに多くの動植物が生息しているんです。この美しい自然をなんとか今の姿でとどめたいものです」という「平ヶ岳を愛する会」の人々の願いが、小さなささやきになつて、草原のあちこちから聞こえるような気がしました。

今までにはただ、山や自然が好き、どんな季節にどんな花たちと会えるだろうかと単純に山登りをしていましたが、これからに少しずつ違う目を持つて山に遊ばせてもらうつもりです。

浅見 真須美

る貴重なお話とスライドを見せていただき、たくさんの人達の地道な力によつてこの素晴らしい自然が守られ、保たれていることを知りました。

確かに日本も余暇の時代に入っているせいか、ゴルフ場やスキーリングなどが増え、寂しいことにありのままの自然が

出していると、そこは一面の湿原。目の前には、大パノラマ。樹林限界のたおやかな姿の山頂。恵まれたお天氣も手伝つて、あまりにも素敵。こんなところに二~三日もいたら最高!

山行の前夜、宿で新潟県地元の理科センターの方によ

昨年8月、平ヶ岳指導員研修登山が行われ、これに参加した会員からレポートが寄せられたが、紙面の都合で掲載がたいへん遅れました。深くおわびします。

(編集部)

7月以降の交通規制

【群馬県側】▶津奈木～鳩待峠間

7月20日(土)	5:00～15:00
21日(日)	5:00～12:00
27日(土)	5:00～15:00
28日(日)	5:00～12:00
8月3日(土)	5:00～15:00
4日(日)	5:00～12:00
10日(土)	5:00～15:00
11日(日)	5:00～12:00
10月5日(土)	5:00～15:00
6日(日)	5:00～12:00
10日(木)	5:00～12:00

【福島県側】▶御池～沼山峠間

7月13日(土) ～14日(日)	18:00～14:00
20日(土) ～21日(日)	6:00～14:00
26日(金) ～28日(日)	18:00～14:00
8月3日(土) ～4日(日)	6:00～14:00
10日(土) ～11日(金)	18:00～14:00
9月14日(土) ～16日(月)	18:00～14:00
21日(土) ～23日(月)	18:00～14:00
10月5日(土) ～6日(日)	6:00～14:00

計画から二十年、総事業費五百億円を投じた「奥鬼怒スバーリ道(林道奥鬼怒線)」が五月上旬、全線開通した。雪が完全に解ける七月上旬にも供用開始の運びになる。奥鬼怒スバーリ道は、農水大臣の定める基本計画に基づき、森林開発公団が建設した。一九七一(昭和四十六)年に基本計画を策定したが、自然環境の豈かな地区を切り開くため自然保護団体の反対もあって、何度も計画変更を経て完成したもの。

林道は、群馬県利根郡片品村大清水と栃木県塩谷郡栗山村大清水との間の四六・六キロ。栃木県側の起点から八丁の湯(栗山村)までは幅員は四メートルだが、八丁の湯

まで幅員の狭い大清水～八丁の湯までの区間はゲートで閉鎖され、林業、治山、緊急車両など村長の許可した車だけは通行できるが、一般車両は通行できないことになっている。

同林道が通過する市町村は、「林業の活性化」につながるとしているものの、輸入木材の圧迫や若年労働力の不足などを林業が不振の現状では、観光面の活用はノドから手が出るほど欲しいところ。一般車両の通行禁止という「歯止め」が外されないよう、自然保護団体として見守っていく必要があるだろう。

奥鬼怒川スーパー林道が完成

秋のアヤメ平～尾瀬ガ原

91年観察会

手伝ください!

会報の発送に四苦八苦しています。手伝ってください。(事務局までご一報)



たむしば

◆

6月8日(土)

の入山者

指導で。午後、大江湿原から沼山峠へ戻る木道のない山道に、ポケット・ティッシュのようなものが一つ。拾い上げてみると、なんと未使用の生理用品。尾瀬もとうとう来るところまで来たかという感じで、やりきれませんでした。

◆

初めて会報の編集を任せられて悪戦苦闘。とりわけ縮め切りを過ぎても、原稿が到着しないのには閉口しました。

◆

とはいえ、企画から原稿依頼まで編集部長にオンブにダッコでした。合掌感謝。

◆

そのベテラン編集部長・青木安弘氏が次号(10月1日号)を担当します。原稿をどうぞお寄せ下さい。(T)

申込・連絡先
江木町165 ☎ 0273-23-9302
宿泊往復交通費含む
申込金2000円を
添え、氏名・年齢・住所・
電話番号を明記のうえ波戸
場秀幸宛
受付
申込金2000円を
添え、氏名・年齢・住所・
電話番号を明記のうえ波戸
場まで(送金は図書券でも
可)。

■カンパの報告

左記の方々からカンパをいたしました。紙上を借りて厚くお礼申し上げます。(敬称略・順不同)(会計・松田)北川寿郎 細川幸男 堀米義徳 浅子かおり 高橋輝雄

吉江橋宏栄 岡野一弥
枝内海清 岩崎茂雄 星雲
城仁 清野英一 福島弥兵衛
湯沢広子 佐竹成夫 近藤明
子富永ムツヨ 真鍋文七
海喜一郎 下川三郎 熊谷瑞
枝金谷ユキ子 小野里正子
岩崎茂雄 中村茂樹
小野良男 川村カウ 木俣陽
長利根朗 野沢史夫 八木幹
雄内海清 村八郎

計一八四、五〇〇円

■新入会員

(五月二十六日現在)

千葉愛子 野口公子 中原敏
京岡田紘一 原田晴子(東山田あつ子(群馬)金子成子
里園木宏志 園木美樹子(川田由加
森浩子 後藤公正 渡辺智恵
子小野武久 山田優佳 小針忠(福島)大杉京子
克子(神奈川)小島隆(栃木)木村英子(茨城)高野初子

尾瀬の自然 第57号

尾瀬の自然を守る会
発行尾瀬の自然を守る会
発行日一九九一年七月二十五日
発行者内海広重
編集者高橋喬
事務局〒156 東京都世田谷区桜三一三十三一
東京農業大学第一高等学校生物教室
内4481
電話03(3425)4481
内43